

オプション教材ルピナス 暗唱長文集



●暗唱の手順 1 日分

・ 1 日目は、まず、**1**の文章を30回音読します。最初の数回はゆっくり正確に「てにをは」などを間違えないように読みます。

正確に読めるようになったら、ある程度早口で棒読みで、句読点などであまり息継ぎをせずに読んでいきます。

イスにきちんと座って読むと読みにくい場合は、歩き回りながら読んでもかまいません。

お母さんやお父さんは、読み方の注意などは一切せずにただ優しく褒めるだけにしてください。

15回ぐらいでもう空で言えるようになることが多いと思いますが、できるだけ30回続けて読んでください。

なぜ回数を決めて繰り返すかという、と、「覚えられたらよい」という目標でやっていると、暗唱の教材が難しくなったときに、「難しいからできなくなった」ということになりがちだからです。「決まった回数を繰り返す」という目標でやっていると、難しい教材になっても同じように暗唱ができます。

30回音読しても暗唱できない場合は、もう10回音読してください。

これでその**1**の文章が暗唱できるようになります。

それでもできない場合は、暗唱の自習はいったん終了してかまいません。また機会を見てやっていきましょう。

●暗唱が難しいときは

暗唱のような短い時間の学習は、夕方にやろうとすると忘れてしまうことがあります。また、毎日同じようにやらないとできるようになりません。できるだけ、朝ご飯の前などに、家族のいる中でやるようにしましょう。

そして、暗唱を毎日やるのが難しい場合は、暗唱の自習はせずに、読書の方に力を入れていってください。

●暗唱の手順 1 週間分

- ・ 1 日目に、**1**の文章を暗唱できるようにします。
- ・ 2 日目は、**2**の文章だけを同じように30回音読し、暗唱できるようにしておきます。
- ・ 3 日目は、**3**の文章だけを同じように30回音読し、暗唱できるようにしておきます。
- ・ 4 日めは、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。すぐに暗唱できなくてもかまいません。
- ・ 5 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。
- ・ 6 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。
- ・ 7 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。すると、**1**から**3**の全部の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の手順 1 か月分

- ・ 1 週目に、**1**から**3**の文章を暗唱できるようにします。
- ・ 2 週目は、もう**1**から**3**はやらずに、今度は**4**から**6**の文章を暗唱します。
- ・ 3 週目は、同じように、**7**から**9**の文章を暗唱します。
- ・ 4 週目は、**1**から**9**の文章を全部通して、毎日4回ずつ音読します。
- ・ すると、1 か月で**1**から**9**の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の活用

・ 暗唱のコツをつかむと、自分の好きな本の1部を暗唱したり、英語の教科書を暗唱したりできるようになります。また、覚えるつもりがなくても、物事が頭に入りやすくなります。

●より詳しい説明は

より詳しい暗唱の仕方は、「暗唱の手引」(<http://www.mori7.net/mori/mori/annsvou.html>)をごらんください。

1 「過去」にあった事実の集合が、そのまま「歴史」を構成するわけではない。その意味で、歴史は完成した詳しい「年表」ではない。

2 長いあいだ社会科の教科書の後ろに綴じられているのを見慣れ、あるいは小学校の教室の壁の長い巻き物のように貼ってあったからだろうか。われわれは歴史と聞くと、すぐにできごとを年号順に並べている「年表」の形式を思い浮かべてしまう。

3 たしかに、年表はグラフなどと同じく、空間を利用した表示技術で、時間的な前後関係が一目でわかりやすい。だから歴史を、時間軸上に過去の記録を並べたもののように想像する人は少なくないだろう。

4 だが、違うのである。歴史は、過去の事実を足し合わせた結果ではない。

ペンヤミンという哲学者が根本から間違っていると批判したのは、「均質で空虚な時間」の白紙に、さまざまな達成が書きこまれていくという、歴史のイメージであった。

5 そこでは空白の時間を埋めるかのように、大量の事実が召集され登録され、「歴史の1ページ」を構成する。この歴史構成の論理は、「足し算」である。

6 過去は収集されるべき対象としてすでに完結していて、現在はいわばその「結果」の位置に、足し合わせられた答えとしてただ置かれているだけだ。

7 しかし歴史は、むしろ現在との「掛け算」である。現在に生きるわれわれの意味づけが掛け合わせられて、はじめてそこに歴史として存在する。現在から意味づけられることがないできごとは、年表に記されないばかりか、じつは事実としていまだ存在していない。

8 「歴史という構造物の場を形成するのは、均質で空虚な時間ではなくて、「いま」によって満たされた時間である」というペンヤミンのことは、過去のできごとと現在の意味との間の掛け算として歴史をとらえるという、見方の転換を提起している。(略)

9 だからそれぞれの個人がそうであったと思っている歴史(his story)は、客観的な事実の知識というより、人間の想像力がつくりあげた認識としての事実、過去に関する物語(story)

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

なのである。

0 ゆえに、過去は変えられないが、歴史は変えられる。そして「現在」という事実は、目で実感的に見ることができても、「歴史」という認識は、誰からも直接的には見えない想像の領域でしか共有されない。けつきよくのところ、残された証言や記録や遺跡や事物などの痕跡から、つながりを推理し、そこに作用していただろう関わりを組み立ててみる以外には生み出しえない。

ここにおいて知るべき歴史とは、学校のテストや入試で求められるような、すでに決められている「正解」ではない。歴史はいつも、たった一つの真実や事実を正解とするものではない複数性をもって現れる。今日の世界を見渡してみればすぐに気づくように、たとえば、パレスチナ世界の側から語られ信じられている歴史と、イスラエル世界の側から語られ信じられている歴史とは、容易に和解できないほど鋭く対立している。もちろんパレスチナやイスラエルの内部も単一ではなく、さまざまな解釈のゆらぎを有しているだろう。あえて正解という表現にこだわりたいなら、「正解は一つではなく、何が正解であるのかは、まだわかっていない」といつてもいい。大人になることの解釈が一つだけではないのと同じように、知るべき歴史もまた、一つ一つの「単語」レベルの事実ではなく「文脈 context」レベルにおける原因と結果の関連づけの物語であって、一つしか正しいものが許されないかのような形にまで限定された過去の「事実」ではない。

(佐藤健二『歴史と出会い、社会を見いだす』による)

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

1 科学が感覚世界から離れてしまうと、解毒剤として科学のはたつきが消える。だから科学がイデオロギーになったり、信仰になったりするのである。個人的なことだが、若いときの私は、いちおう科学者の業界で生きようとしていた。2 ただどうしてもなじめなかったのは、科学のなかでの「同じ」という部分である。科学は感覚の世界を基礎とする。そこから「同じ」世界を見直すだけのことである。そう思えば、話は簡単だった。3 しかし客観的とか、独創的とか、モノに即すとか、理論的とか、とにかく当たらずといえども遠からずという表現ばかり周囲から与えられたから、実際には「科学の世界でなにをしたらいいか」、よく理解できていなかった。だから私は「科学者」になりそびれたのである。

4 解剖をやったのは、その意味では正解だった。若いころ、私の脳には抽象的な傾向があつた。つまり放つておけば「思想がある」、つまり「同じ」世界しか存在しなくなつたに違いない。ところが死体というのは、抽象とはもつとも遠い世界である。5 死体という言葉すら、私はじつは使いたくない。なぜならそれは既成の言葉であつて、実際には死体とは死体という言葉で意味されるようなものではないからである。それは一人一人違つていて、「感覚の世界」と私がいう、それそのものなのである。

6 虫の世界も同じである。世間で暮らせば、虫は虫である。ところがその多様さは、ほとんど気も狂わんばかりである。日本のヒゲボソゾウムシは、ついこの間まで、たかだか十種ほどだったが、今年は新種に名前がつけられて、二十種ほどに増えるはずである。7 それで終わりかというなら、まだ種数が増えたと私は確信している。それを生物多様性というのだが、この言葉が世間によく通じないのは、すでに世間では「同じ」世界が優越しているからである。お金がそうで、経済がそうである。8 商品にはじつは「同じもの」しかない。そうでないと、値段がつけられない。まったく独特のものには、値段がつけられないからである。

世間では、
「虫は要するに虫だろ」

という。つまりすべては「同じ」虫なのである。9 そこには生物多様性なんかない。ここには言葉が基底にあつて、それ以下に潜ろうとしないという、いまの世間の態度がみごとに示されている。同様にして、
「死体は死体だろ」
で世間の話は終わる。しかし、言葉より以下に「降りなければ」、言葉創ることはできない。0 だから現代人は「既成の言葉をただ運転している」と私はいう。それをコミュニケーションなどと称するのである。それで人生が済むと思つていられるのは、自分以外のだれかが感覚世界と格闘してくれているおかげである。そんなことは、夢にも思つていないであろうが。

（養老孟司『無思想の発見』による）

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

1 いまでは歩きながら考えるということがなくなつたと嘆いたのはアドルノだが、散歩するということは、思考にとつて思わぬ刺激となる。机の前ではものを考えられないという人も多いだろう。精神の働きは、身体の揺れから大きな影響をうけるのだ。2 歩いている周囲の風景が展開し、新しいものが見えてくるたびに、思いは誘われる。ここでは、思索することにおいて、身体の移動という単純な行為がどれほど重要な意味をもつことがあるかを考えてみよう。3 散歩とはときには思考の対象そのものになることもあるのだ。ストア派はアゴラのストア（列柱）の回りを歩きながら思考を深めたのだし、エピクテトスは散歩することを自己の鍛錬のための大切な手段だと考えていた。4 散歩しながら町でさまざまな人と行き違ふ。美女を見て、ああ、あんな女性の愛人になれたらというような欲望に動かされなかったか、富んだ人を見てうらやましいと感じなかったか、権力者を見て、何か頼みたいと思わなかったか。自分の魂の動きを吟味するために散歩が利用されたのだ。5 近代にいたつても散歩を思考の習慣とした人物にルソーがいる。歩くことはルソーにとつては、みずからとの一体感を味わうための重要な方法だった。『孤独な散歩者の夢想』ではルソーは、歩きながら浮かんでくる夢想を記録することが自分の心の状態を記述するための最高の方法であると、次のように語っている。6 「この孤独と瞑想のときが、一日のうちで、気が散ることもなく、妨げられることもなく、私が十全に私であり、私自身のものである、そして自分が自然の望んだとおりのものであるとほんとうに言うことのできる、唯一のときなのである」。7 またニーチェは歩きながら考えた。歩くたびに新しい思考が生まれる。その思考の種子を鉛筆でなぐり書きする。そして帰宅すると、その思考の種子に水をやり、思考を展開させる。散歩をしていると唐突に驚くべき思想が訪れるのだ。8 永遠回帰の思想もこうしてニーチェを襲った。「あの日わたしはシルヴァプラーナの湖に沿って森をいくつか通り抜けて散歩していた。スールレイの近くにピ

ラミッド型にそびえている巨大な岩があり、そこで立ちどまつた。その時この思想がわたしに、到来した」。9 ニーチェは本を読むことを軽蔑していた。歩きながら生まれた思考の芽生えを育てるためにこそ、残された時間を費やすべきだと考えたのだ。

ルソーもニーチェも歩きながら、ほとんど外の光景を眺めていない。自分の心に浮かぶ思念が重要なのであり、歩行という営みは、その思念を生みだすための身体のリズムなのだ。10 だとすれば、歩行するのは街路や高原である必要はない。ときには部屋の中だけでも歩けるだろう。カフカは、二種類の旅を対比させている。外延的で組織された旅と、内包的で、「破片、難破、断片による旅」である。

最初の旅では旅人は外の世界を歩きまわる。旅には手配や組織が必要であり、外の光景が必要である。しかし第二の旅で重要なのはその内的な強度である。だから自分の部屋の中でも実行することができ。ドゥルーズはカフカがこの強度の旅について、「自分だけの遊歩道がつかれない場所はどこにもない」と語っていたことを指摘する。部屋の中を歩きながら、あるいは部屋の中で横たわったままで、カフカは内的な旅を強行する。夢の中ですらカフカはつねに歩きまわっているのである。

（中山元『思考のトポス 現代哲学のアポリアから』による）

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34